命なりけり

命なりけり

丹羽文雄文学全集　第七巻

講談社

丹羽文雄文学全集　第七巻
命なりけり
一九七五年十月八日　第一刷発行
著　者　丹羽文雄
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二丁目一二一・郵便番号一一二
電話　東京(〇三)九四五一一一一一(大代表)・振替　東京三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　株式会社小島製本所
定価は箱に表示してあります
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
(文1)
©丹羽文雄　一九七五年 Printed in Japan

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

命なりけり……7
創作ノート……405

装幀・辻村益朗

（写真・一九二五年）

丹羽文雄文学全集　第七巻

命なりけり

命なりけり

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

落葉拾い

老女が三人、林の中にはいった。武蔵野のおもかげの残る林である。松の梢が、ほどよく空をおおっていた。中には、ひと抱えもある幹がある。空がおおわれているので、雑草は伸びかねて、すでに黄色になっていた。松笠が落ちていた。三人の老女の白髪が光るようで、ひときわあざやかであった。老女は林の中を歩くことがたのしいらしく、ゆっくり林の中央に進んだ。三人のあとから背の高い、若い女がピクニック用の籐のバスケットを下げてつづいた。自然のままの黒いゆたかな髪を、清潔にたばねている。白の大柄の大島がすりに、白鷺を染め出した臙脂の帯が、林の中では妖しく、なまめかしい。そのうしろから運転手が、ダンボールの中箱と、赤い毛氈をまるめたのを抱えてつづいた。無言の進行がしばらくつづいた。

「すばらしい土地ですね」

白髪のひとりがいった。男の子のように刈り上げた、小柄の老女である。ゆうきの茶無地のきものに、小紋の茶の羽織をきている。つやつやとした、白い、可愛い顔立である。

「十四、五年にもなりますかしら。義理で、むりやり買わされたんですよ。山林ということでね。見ずに買いました」

「いまなら大へんな財産ですわ」

「ほしいといってくるひともありますが、べつにお金の必要もないので、すててあります。おかげで、松の木も切られずに……」

と、明治時代の束髪を思いきって小さくした束髪の老女が答えた。老女は、あたりの松をながめやった。切られずにすんでいる松の命を、よろこんでやる眼差しである。藍大島のこまかいかすりで、ついの羽織だった。白い肌がつやつやとしている。

「何坪ありますか」

べつのひとりが訊いた。

「千坪をすこし欠けますかしら」

「たのしみですね。将来ますます値が上がって……」

束髪の老女が、問うた。

「私の将来ですか」

答えがなかった。が、白髪を一束にたばね、小さい髷をつけた老女の肩が、すこし笑ったようであった。

「当年とって八十歳ですよ」
「私たちもおなじ年齢ですわ」
三人の老女の笑い声が、林の中の静寂に吸いこまれた。三人は、ある女学校の第一期生であった。そのときの卒業生で残っているのは、この三人になっている。束髪の老女が、あたりをたしかめるように見まわしてから、
「鈴鹿さん」
「はい、おばさま」
若い女が、束髪の老女に近付いた。

毛氈が敷かれた。でこぼこしているのは、仕方がない。が、かえって風情があるだろう。ダンボールの箱と、バスケットがおかれた。
「私は、車の方でお待ちしてます」と、運転手がいった。
「ご苦労さま。ながくは待たせませんが、退屈だったら、車の中で眠ってて下さい。風もなく、小春日和のいいお天気ですわ」と、束髪が答えた。
刈り上げの老女と、髪を一束にした老女は、自分のすきな方向へ林の中を歩いていった。
一束の老女は、蚊がすりのきものをきているが、いずれ亡夫のかたみであろう。それにゆうきの、渋い、古代紫の羽織だった。老女は小さい、黒いハンドバッグから手帖を出すと、手帖についている小さい鉛筆で、何か書きこんだ。あたりの風景を見て、しばらく沈思するふうであった。書きとめると、顔をあげ、手帖をひらいたままで歩き出す。胸にうかぶことばを、あたりの景色に託して書きとめているようすだった。はるか遠くに、バスが走っていた。音はきこえない。農家が点在する。農家は、武蔵野のおもかげの中にとけこんでいた。このあたりには、耕運機も走らない。昔からの風致地区であった。
鈴鹿は、ダンボールの箱からビニールにつつまれた、小さいスコップがとり出されるのを見ていた。小さい薬罐があらわれた。
「さっそく間に合せの炉を切らねばなりません」
正座した、束髪の魚住泰子がいった。鈴鹿はあたりを見まわした。いたるところに松の根がはっていた。土を掘れば、松の根にぶつかるだろう。
「素焼の風炉なら、持ちはこびに便利だったでしょう」
「それでは、面白くないですよ。真形、丸釜、筒釜、富士釜にも、今日は用がないのです」
そして、鈴鹿の顔をまっすぐ見た。一重のようにみえる二重まぶたを鈴鹿はしていた。眉尻がすこしさがっている。ひろい額は、いくらかおでこ気味だが、聡明さと明朗さを感じさせる。魚住に否定されて、ひっこみのつかないのが微笑となった。アルカイック・スマイルである。ギリシャ先住民族の彫刻にみかける、笑うと口尻がつり上が

る。すこし唇が厚い。こまかくて、きれいな歯並びだった。口尻の上に、小さいえくぼが出来た。唇の動きに、あふれるような若さがあった。ひろい肩幅も、いかつくなくて、背丈にふさわしかった。鈴鹿の顔は、どこか能面の若い女に似ていた。高貴な、うら若い美しさを感じさせる。能面は、喜怒哀楽のいずれの感情の変化にも応じられるように考案された中間的表情である。魚住泰子は姪の顔をみていると、能面のもつ中間的表情を感じる。位星でもつけたら、もっとよく似合うだろう。

ふたりの老女は、たがいにじゃまにならない程度に間隔をたもっていた。髪を一束にした老女は、メモでもとるようにしきりと小さい手帖に書きこんだ。書きこんでいるのは、俳句だった。鶴岡礼子といえば、俳句の世界では名を知られていた。かの女は、殉情のひとといわれた。情熱のひとといわれた。三十代から俳句をつくり、代表的な俳句雑誌の同人だった。その中の重鎮だったが、鶴岡礼子には野心がなかった。句を作ることで生きているふうであった。若い同人は、かの女の高齢におどろいた。そして、その俳句の若々しさにまたおどろいた。蚊がすりに古代紫の渋い羽織をきているが、生理的に枯れた中にもどこか昔の妖艶さをとどめていた。かの女の句は、枯淡にならなかった。五十年来、おなじ調子である。恋をうたい、生活を句にしてきた。俳人は多くのことを知る必要はない、流行に左右される必要もない。ひとつのものを知れば、それの最上の用い方を発見し、みがきをかければよいと信じているようであった。鈴鹿は、伯母から鶴岡礼子の恋の巡礼をきかされることがあった。伯母のところに毎月寄贈される俳句雑誌の中で、鶴岡礼子の俳句をよんだ。尊敬こそすれ、そんな過去のあったことを、すこしもさげすむ心にはならなかった。

「あのひとにとっては、俳句をつくることが命なのです。俳句は、あのひとを救いました」と、魚住泰子がいった。

「男から男にわたりあるいたけれど、俳句をつくることを捨てなかった。といって、俳句でえらいひとになろうという野心もなかった」

「ちょうどおばさまが、お茶ひと筋に生きてきたのと、おなじ人生ですわね」

と、鈴鹿がいった。

「そう、私は、一人子を失ってから、ずうっと今日までお茶だけに生きてきました」

「そして、江見のおばさまには、謡があります。それも、おなじ理屈ですわね」

「あの方は、ときどき舞台に立ちますよ。ちっとも年齢を感じさせない。おみごとですよ」

そのとき、江見延江は松のあいだをお能の舞台と錯覚し

ているらしく、お面をかぶり、鬘をつけ、長絹で、鬘扇でももっているようにかまえていた。刈り上げた白髪が、冬の陽にかがやいた。江見延江は謡いながら、ゆっくり動いた。風致地区の松林の現実は、わすられていた。鈴鹿はその近くまで、落葉を拾いにきていた。松笠を二つ三つ拾い、動くのをやめて、江見延江をながめやった。謡がきこえた。永年きたえた声である。女を感じさせない、落着いた声であった。

「……見仏聞法の数々、順逆の縁はいやましに、日夜朝暮におこたらず、九夏三伏の夏たけて、秋来にけりと驚かす……」

よくわからなかったが、鈴鹿はそんなふうに聞いた。

野外では、炉を切り、竹を組んで釣り釜をかけるのだが、風致地区の松林の中では、そんな風流はいらない。松の根のじゃまにならないところで土を掘り、そこらの小石をあつめ、即席の炉をつくった。釣り釜のかわりに、薬罐がのせられた。

「松笠は火力がつよいから、燃えつけば、しめたものです」

「野趣満点ですわ」

と、鈴鹿が笑った。かまどの中から、白くて、濃い煙がのぼった。

「今日は、あなたの送別会ですよ」

鈴鹿が思いがけないという顔をした。

「おふたりには、まだ話してありません。お茶をのみながら、発表します。先輩のことばには、いろいろと参考になることがあります」といってから、魚住泰子が思い出したように苦笑した。「あなたは二十五歳、私たちは八十歳。あんまりひらきがあります。だけど、女の生き方には流行はありません。私たちは普通のひとにくらべると、ゆうに二人分は生きてます。ことに鶴岡礼子さんのお話は、傾聴に値するでしょう。虚心となって聞くのですよ」

「はい」

江見延江が、半分は舞台のつもりで、次第にこちらに近付いて来た。とおくの松のあいだを歩いていた鶴岡礼子も、こちらに向って歩いていた。手帖はひらいたままである。

「運転手は何て思ってるでしょうね」

「ものずきと、呆れているでしょう。でも、私たちはこんなことをして余生をたのしんでいるのではありませんよ。そんないいかげんなものなら、とても八十までは生きられません。三人とも、自分の道に打ちこんでいます」

「何かひとつ打ちこむものを持っているひとは、ことに女のひとは、仕合せですわ」

「あなたはこれからです。近日結婚するのです。私たちの

ように生きられるかどうか、これからきまるのです」
ふたりの老女が毛氈に近付いた。魚住泰子が、茶籠をとり出した。
「何を謡っておいででしたか」
と、魚住が訊いた。
「ちょっと、東北を……」
江見延江が、毛氈に上がった。
「あらためて聴かせていただきますわ」
何ということなしに江見延江が、鈴鹿に笑いかけた。三人の老女の顔は、いずれもきれいにみがきあげられている。素顔はつやつやとして、白い。鈴鹿の若さだけではかなわないものがあった。
「この子に、今日の思い出に、何か書いてやって下さい」
と、魚住が鶴岡礼子にいった。
「あいにく今日は、何も準備してないですよ」
「いいえ、後日で結構ですわ。この子も、いよいよお嫁入りします」
アルカイック・スマイルをみせて、鈴鹿は目を伏せた。いっときふたりの老女の眼差しが、鈴鹿の上におかれた。終着駅にたどりついた古機関車が、これから出発しようとする列車をながめているようであった。
「それは、おめでとうございます」と、江見延江が平凡にいった。
鶴岡礼子もおなじことをいったが、つづけて、
「おいくつにおなりですか、鈴鹿さん?」
「二十五になりました」
代って魚住泰子が、答えた。
「それだけのごきりょうで、お家もよいのに、どうしておそくなったのでしょうね」
「いろいろと家庭の事情がございまして」
魚住泰子は鈴鹿のすべてをあずかっているような口をきいた。そのあいだに、魚住は携帯用の茶籠から、玩具のような茶道具一式を取出した。バスケットから、蓋付の菓子器を出した。主菓子は、後の雛である。銘菓のひとつだが、中に紅白にふたつならんだものがあり、何となく内裏雛を連想させ、春の雛に対して秋の雛であり、後の雛といわれた。が、何のことはない蒸羊羹の切出しである。
「深草の少将ではございませんが、百夜も通うほどの熱心なひとがあらわれて、この子もつい相手の情熱にほだされ、結婚する気になりました。長谷部家では、この子の母親が亡くなりましてから、冷遇だったのです。だれもこの子の結婚をいそいではくれなかったのです。ぼやぼやしている内に、二十五にもなりました」
「でも、そんなに思われて結ばれるのなら、お仕合せね」
鈴鹿の全身にあふれている若々しさを感じると、鶴岡礼

子は自分の昔が思い出されるらしかった。おぼえのあることである。さっそく、句が浮かんだ。鶴岡礼子はふところにしまった手帖をとり出して、書きとめた。
「この子も、心中ひそかに思いをよせていたひとがあったのですよ」
「あら、おばさま、そんなこと……」
「だれにも知られず、嫁いでいくとなると、あなただって淋しいでしょう。私は、ちゃんと知ってましたよ。口に出すのは、今日がはじめてですが、あなたの心の奥の秘密は私があずかりましょう」
と、魚住泰子がまじめな顔でいった。
「そういう秘密を知りながら、いままでだまっていたのは、泰子さん、あなたの責任ですよ」
抗議しないでいられなかったのは、鶴岡礼子だった。抗議されるだろう、と魚住にはわかっていた。
「世の中は、とにかく皮肉にできてます。好きなひとには、奥さまがおありだった」
「そんなことは、いまどき大して障害になりませんよ」
「いまも、昔もですか」
「はい、昔もいまも。この私が体験しました。何ですか、鈴鹿さん、そんな気の弱いことで……？」
「いじめてやって下さいよ。たしなめてやって下さいよ。私はこの子が結婚にふみきったと知ったとき、うんといじめてやりたくなりました。どういう気なんですかね。可愛さあまって憎さ百倍ですか。ちょっとやそっとでは、この子は泣きそうにない。いじめがいがあるでしょう」
魚住の口調は、さばさばとしていた。
「鈴鹿さん、身長は？」
と、鶴岡が訊いた。
「一六四センチでございます」
そんな身長を申し訳ないというふうに、鈴鹿は肩をすぼめた。
「一六四センチ、どうもメートルはぴんと来ませんね」
「五尺四寸です」
「おみごと」
と、江見延江がいった。
「体重は、十五貫」
「いやですわ、おばさま」
茶筅とおしもすんで、魚住泰子はお茶をたてる段階にはいっていた。生れた月が早いので、鶴岡礼子が正客だった。鶴岡は、「お先に」と一礼して、菓子器を両手でとっていただき、「お菓子を頂戴します」といった。懐紙を出して、膝前においた。くろもじを懐紙の上におき、菓子器の蓋をとる。作法どおりの所作である。茶室にいるかのような態度であった。が、いかにも作法にしたがっているという窮屈な感じがなく、そうするのがいちばん自然な所作

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com